

稲成遺跡発掘調査概報

1990年3月

(財)和歌山県文化財センター

序

遺跡の所在する田辺市は県下で和歌山市に次ぐ人口約7万人を数える紀南の中心都市で、古来より熊野街道や紀州航路の要衝地として栄えた活気ある歴史の町です。市内には縄文時代早期の高山寺貝塚や古墳時代の磯間岩陰遺跡、白鳳時代の三栖廃寺など国指定の著名な史跡も多く、人々の古代から現在にまでいたる永遠の営みを物語っています。

このたび市内の稲成町におきまして、荒光地区土地区画整理事業が計画され、工事に先立ち当文化財センターが稲成遺跡の発掘調査を実施致しました。その結果、古代の自然流路から多数の土器や木製品が出土し、当時の暮らしを知る貴重な資料となりました。

ここに調査の成果をまとめ、概要報告書を刊行する次第であります。本書が当地方の歴史を知るうえで一つの資料となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり数々の御協力をいただいた関係各位並びに調査事業の推進に絶大なる御援助を賜った地元関係者及び土地所有者の皆様には、深く感謝の意を表し厚くお礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮 谷 志 良

例 言

1. 本書は荒光地区土地区画整理事業に伴う稲成遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は和歌山県の委託を受け、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 調査は和歌山県教育委員会の指導を受け、調査委員赜磨正信・巽 三郎・都出比呂志・藤澤一夫（和歌山県文化財保護審議会委員）各氏の指導、助言を得た。

和歌山県教育委員会

財団法人和歌山県文化財センター

文化財課長	北野全美	事務局長	鍋島伊津夫
文化財課副課長	堀代喜蔵	事務局次長	菅原正明
文化財課主幹	高橋 彬	埋蔵文化財課長	辻林 浩
文化財課文化技術班班長	吉田宣夫	埋蔵文化財課主査	永光 寛（担当者）
文化財課文化技術班専門員	藤井保夫	埋蔵文化財課技師	黒石哲夫（ 〃 ）
		管理課長	松田正昭

5. 調査にあたっては、奈良国立文化財研究所史料調査室綾村宏氏、田辺市教育委員会から御指導、御協力をいただいた。お礼申し上げたい。
6. 本概報は黒石が編集、執筆した。遺構写真の一部は中林都志が撮影し、遺物実測に川崎雅史の協力を得た。
7. 本書で使用した遺物番号は、本文・図版においてすべて共通する。

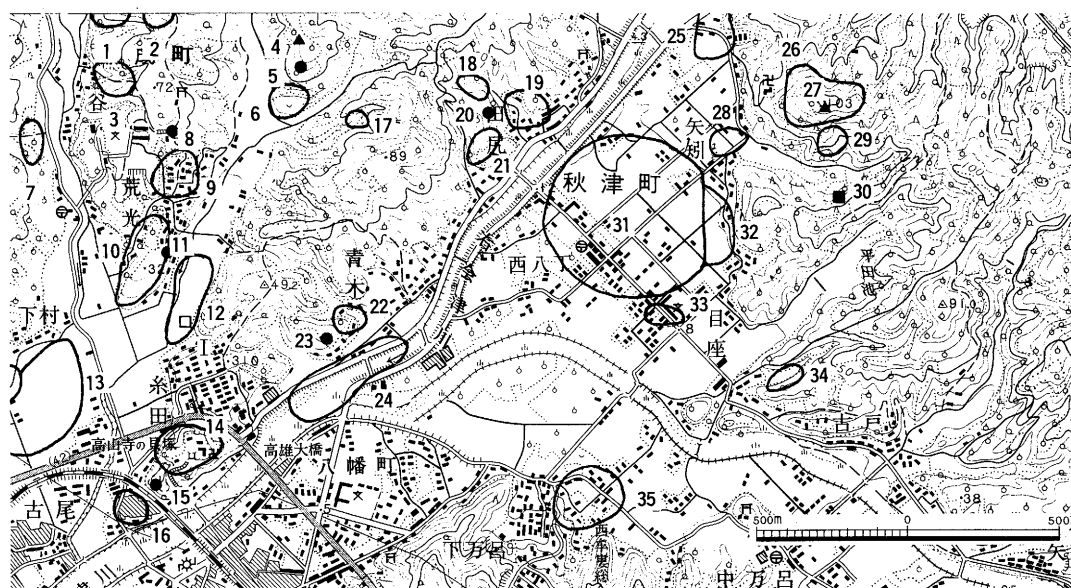
目 次

序文	図目次	図版目次
例言	第1図 周辺の遺跡	図版1 調査区全景
I 位置と環境——1 P	第2図 調査区位置図	図版2 遺物出土状況
II 調査経緯——2 P	第3図 土層模式図	図版3 S D 1 遺物
III 調査	第4図 調査区平面図	図版4 S D 1 遺物
1 遺構——2 P	第5図 S D 1 土層図	図版5 S D 1 遺物
2 遺物——5 P	第6図 S D 1 遺物実測図	図版6 S D 1 遺物
IV まとめ——6 P	第7図 〃	
	第8図 〃	

I 位置と環境

稲成遺跡は紀伊半島南部の田辺市北西部を流れる荒光川が形成した開析谷の下流に位置する。現在、周辺の土地では荒光川の流路とほぼ並行した区画割りで水田耕作が営まれている。

周辺の稲成川流域から会津川流域にかけては多数の遺跡が密集しており、紀南地方では早くから開発された地域である。稲成遺跡の東南に半島状に突き出た丘陵には高山寺貝塚があり、縄文早期中葉の高山寺式土器の標識遺跡として、古くから著名である。丸橋丘遺跡や目座遺跡、矢矧遺跡でも縄文中期から晩期にかけての土器や石器が出土している。弥生時代の遺跡は右会津川の右岸に多く、綾代遺跡、矢矧遺跡、八丁田圃遺跡等がある。岩倉山からは、現在のところ所在は不明であるが推定高 100 cm 程の突線鈕式の銅鐸が出土したと伝えられている。田辺市では他に 4 ケ所から銅鐸が出土している。古墳の分布は紀北地域と比較すると稀薄であるが、稲成山古墳、糸田古墳、青木古墳などが周辺に点在する。海岸部では海蝕洞窟を利用した岩陰墓が古墳時代に盛行し、国指定史跡の磯間岩陰遺跡では 4 世紀後半から 7 世紀にかけて 14 体が追葬されていた。また、古目良遺跡などでは弥生時代末から平安時代に至るまで製塩が行われており各時期の製塩



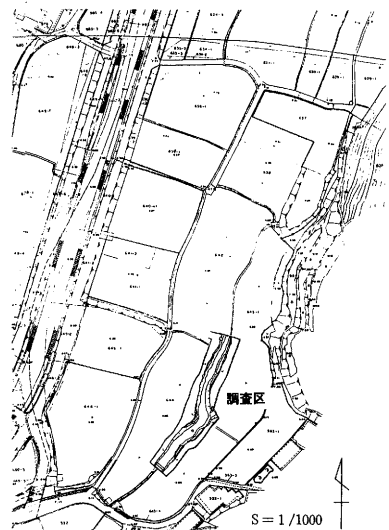
- | | | | |
|------------|-------------|------------|---------------|
| 1. 奥江原遺跡 | 10. 稲成Ⅰ遺跡 | 19. 秋津廃寺跡 | 28. 上新田遺跡 |
| 2. 東江原遺跡 | 11. 東江原火葬墓 | 20. 峯の庄火葬墓 | 29. 矢田ヶ谷銅精練所跡 |
| 3. 奥江原窯跡 | 12. 稲成遺跡 | 21. 脇ノ谷瓦窯跡 | 30. 岩倉山銅鐸出土地 |
| 4. 丸橋丘岩陰遺跡 | 13. 下村遺跡 | 22. 大峯遺跡 | 31. 八丁田圃遺跡 |
| 5. 丸橋丘火葬墓 | 14. 高山寺貝塚遺跡 | 23. 青木古墳 | 32. 目座遺跡 |
| 6. 丸橋丘遺跡 | 15. 糸田古墳 | 24. 綾代遺跡 | 33. 目座Ⅱ遺跡 |
| 7. 天王原遺跡 | 16. 糸田遺跡 | 25. 矢矧遺跡 | 34. 古戸谷遺跡 |
| 8. 稲成山古墳 | 17. 小屋川瓦窯跡 | 26. 岩倉山遺跡 | 35. 下万呂Ⅰ遺跡 |
| 9. 稲成Ⅱ遺跡 | 18. 堂ノ谷瓦窯跡 | 27. 矢矧岩陰遺跡 | I. 発掘調査地 |

第1図 周辺の遺跡

土器が出土している。奈良時代の遺跡には丸橋丘・東江原・峯ノ庄などの火葬墓や小屋川・堂ノ谷・脇ノ谷などの瓦窯があり、北東部の台地上には牟婁郡で唯一の白鳳寺院で法隆寺式の伽藍配置と推定されている三栖廃寺が存在したことからこれらの瓦窯の製品が同寺に供給されていたようである。平安時代には高雄山と仮庵山の経塚が営まれており、銅製経筒・鏡筥・鏡・合子などが出土している。中世の遺跡としては矢矧遺跡があり、溝・井戸・柱穴などが発掘されている。

Ⅱ 調査経緯

和歌山県教育委員会は昭和63年2月に、国道42号線田辺バイパスの予定地内で埋蔵文化財予備調査を実施し、稲成町内に所在する稲成遺跡埋蔵文化財包蔵地で幅約7m、深さ1.2mを測る自然流路を検出した。流路内には土器類や木製品が包含されており、県教育委員会は建設省と協議の結果、財団法人和歌山県文化財センターに委託して、自然流路を中心に約860㎡を昭和63年度に発掘調査した。平成元年度に前年度調査地から下流約百数十mの水田で荒光地区土地区画整理事業が予定され、県教育委員会は当センターに委託して、前年度と同様に自然流路を長さ約60mの区間において発掘調査を実施した。



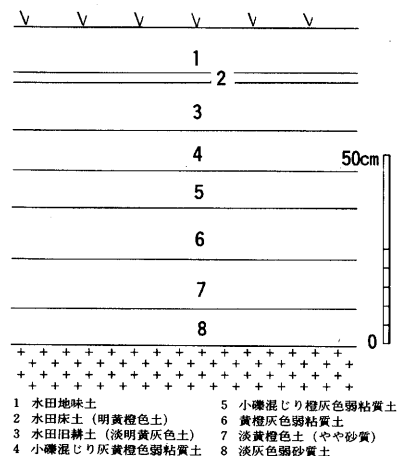
第2図 調査区位置図

Ⅲ 調査

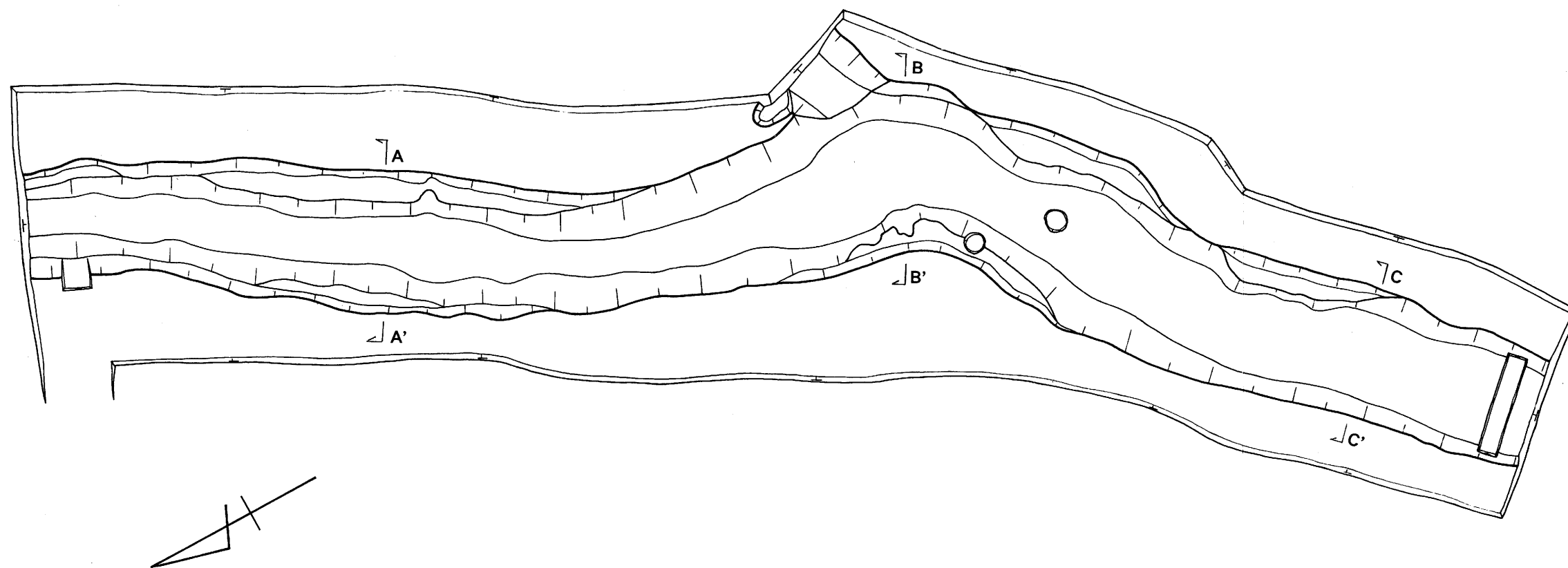
1 遺構

基本層序

調査区の土層は均質で南北方向にはほぼ水平に堆積し、東側に丘陵が延びているため、東から西にはゆるやかに傾斜して堆積している。また、水田畦畔を境に西側は東側より50cm程低くなっている。土層は基本的に次の4つに大別できる。①現在の水田の耕作土（1、2）。②旧水田の耕作土（3）。③平安時代中期から近世に至る包含層（4、5）。④弥生時代中期から平安時代に至る包含層（6、7、8）。調査で検出した自然流路は④の上面から切込んでおり、平安時代中期の遺物以外に④の包含層内の弥生土器や古墳時代および奈良時代の遺物も伴っている。



第3図 土層模式図



第 4 図 調 査 区 平 面 図

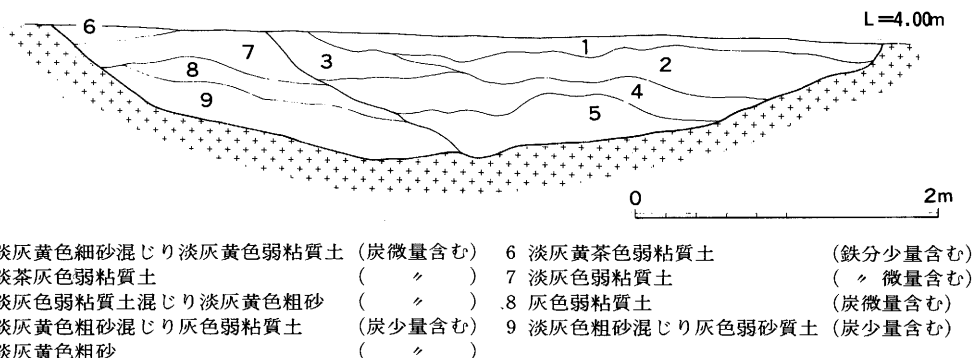


SD1

SD1は調査区を北から南西に貫流する自然流路である。今回の調査では長さ約60mの範囲を発掘した。流路の幅は4.5m～7.0m、深さは0.4m～0.9mを測る。調査区中央部の土層の堆積状況から埋没時期に2時期あることが窺える。すなわち、一旦すべて埋没した後で、西側のやや低い部分が再び流路として機能していたようである。しかし出土遺物に時期差は認め難く、短期間の内に2度埋没しているようである。埋土は砂礫と粘質土が乱雑に互層をなしており、大木の根や幹も流された状況で出土している。こうしたことから、上流の動鳴気溪谷からの大量の土砂で埋没したと考えられ、藤の実や松の実を多数含むことから秋の豪雨によるものだと考えられる。

SD2

SD2は調査区中央部で検出した幅約3.5m、深さ0.8mを測る溝である。確認したのは約2m程で自然流路か人工の溝か判別し難いが、東の山裾から南西の低地へと延びていたようである。遺物は少ないが、弥生土器や庄内併行期の土器、平安時代の黒色土器片が出土している。



第 5 図 SD1 土 層 図

2 遺物

1～80はすべてSD1の出土遺物である。遺物は水流で攪乱されており、層位ごとのまとまりは認められなかった。

弥生土器・庄内式土器

1は広口壺の口縁部である。2～6は高杯の脚部である。5の内面にはクモの巣状の細かいハケ目がみられる。7は壺の底部である。1～7までの土器はすべて表面が著しく磨滅している。

須恵器

8～11は杯身。8は口径が小さく器高が高い。その他は口径大で器高も低い。13～16は壺の口縁部。15の頸部には淡黄緑色の自然釉がかかる。17は双耳壺の頸部。暗灰色で焼成堅緻。18・19は杯蓋で19の外面には淡黄緑色の釉がかかる。20～23は杯身で、いずれも淡灰色で焼成堅緻。24はミニチュアの壺。25は高杯脚部。26は平瓶で、27も平瓶の頸部だと思われる土器で、外面には叩きしめたあとと横方向のカキ目が施され、直径約1.5cmのボタン状の物が貼り付けられている。

土師器・黒色土器・製塩土器

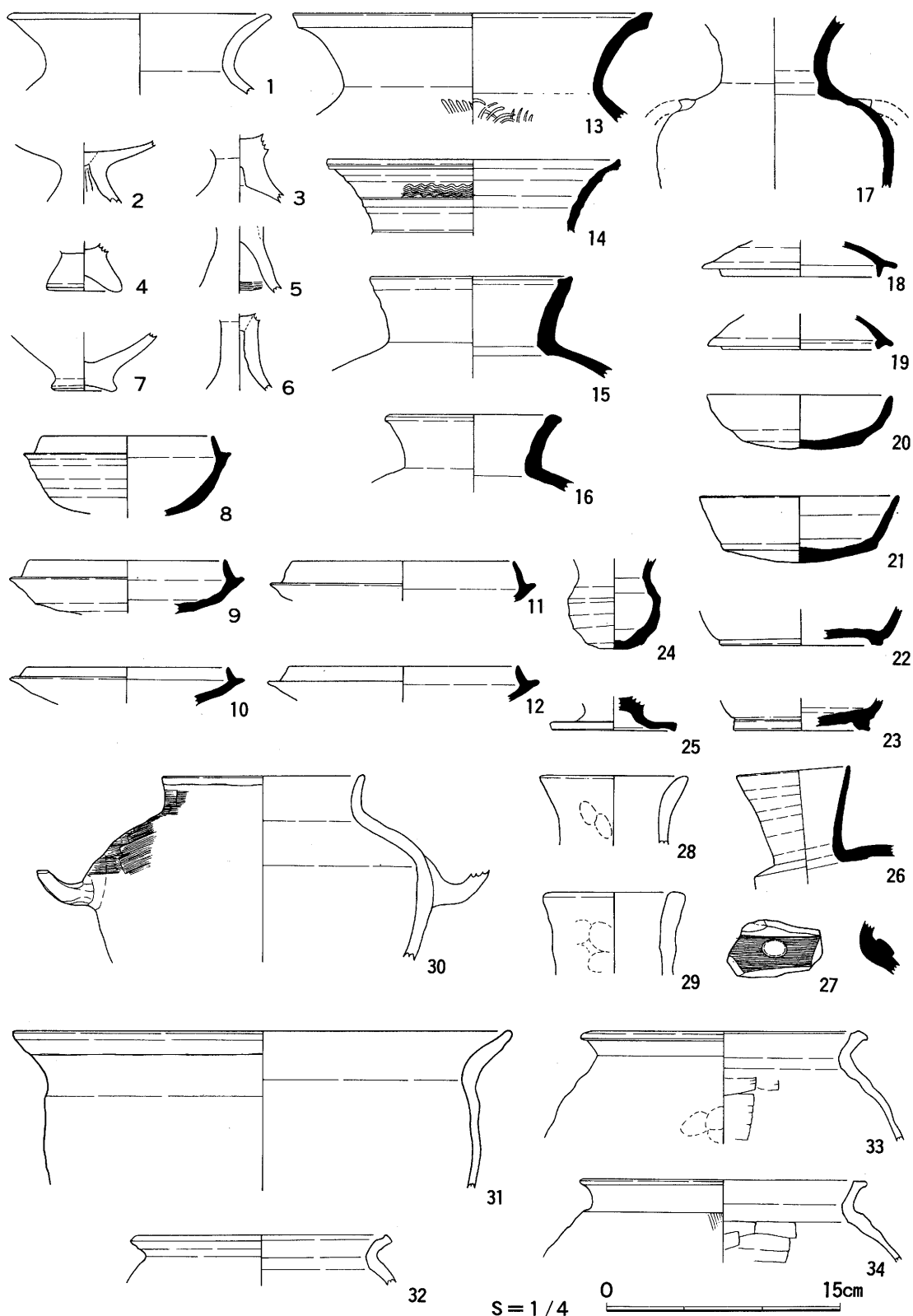
28・29は製塩土器。30は把手付きの鍋で外面には細かいハケ目がみられる。31は長胴の甕。32～34は甕の口縁部。31～34の外面には煤の付着がみられる。35は完形の台付皿で、内面にはヘラ^{〔賀カ〕}で左右2列に文字が刻まれている。左列は「相□□」と読め、右列は判読不能であった。口縁部の所々に煤が付着しており灯明皿として使用されていたようである。36～42は土師器の碗である。38はヘラ切りで削り出しの底であるが他はすべて貼り付け高台をもつ。42は内面にヘラ磨きがみられ、重ね焼き痕が残されている。43～50は黒色土器碗である。43・44は黒色土器B類で、43はやや粗いヘラ磨きが内外面にみられ、44は細かいミガキが内外面にみられ口縁部に沈線が一条ある。45はA類で内面見込み部には螺旋状のヘラ磨きがみられ、焼成堅緻で器壁も薄くシャープな造りである。46・47はA類の杯で内面には非常に細かく密なヘラ磨きが施されて焼成堅緻で銀灰色を呈している。48は形態やヘラ磨きの様子から黒色土器碗と思われるが内外面とも素焼きである。49・50はB類で内面見込み部には鋸歯文状のヘラ磨きがみられる。51・52は土師皿で器高が低く扁平である。51の内面にはヘラ記号がみられる。53～64はいわゆる多段ヨコナデ技法で成型された土師皿である。焼成堅緻で胎土精良であるが、淡明橙色の個体と淡灰黄緑色の個体の2種がほぼ同量出土している。なお、48の土器も淡灰黄緑色でよく似た胎土である。65は大型の碗で口縁に沈線が一条ある。66～68は杯で、66の内面には細かいハケ目がみられる。69は薄手の中皿である。70・71は小型の皿で、71は底部に回転糸切り痕がみられる。

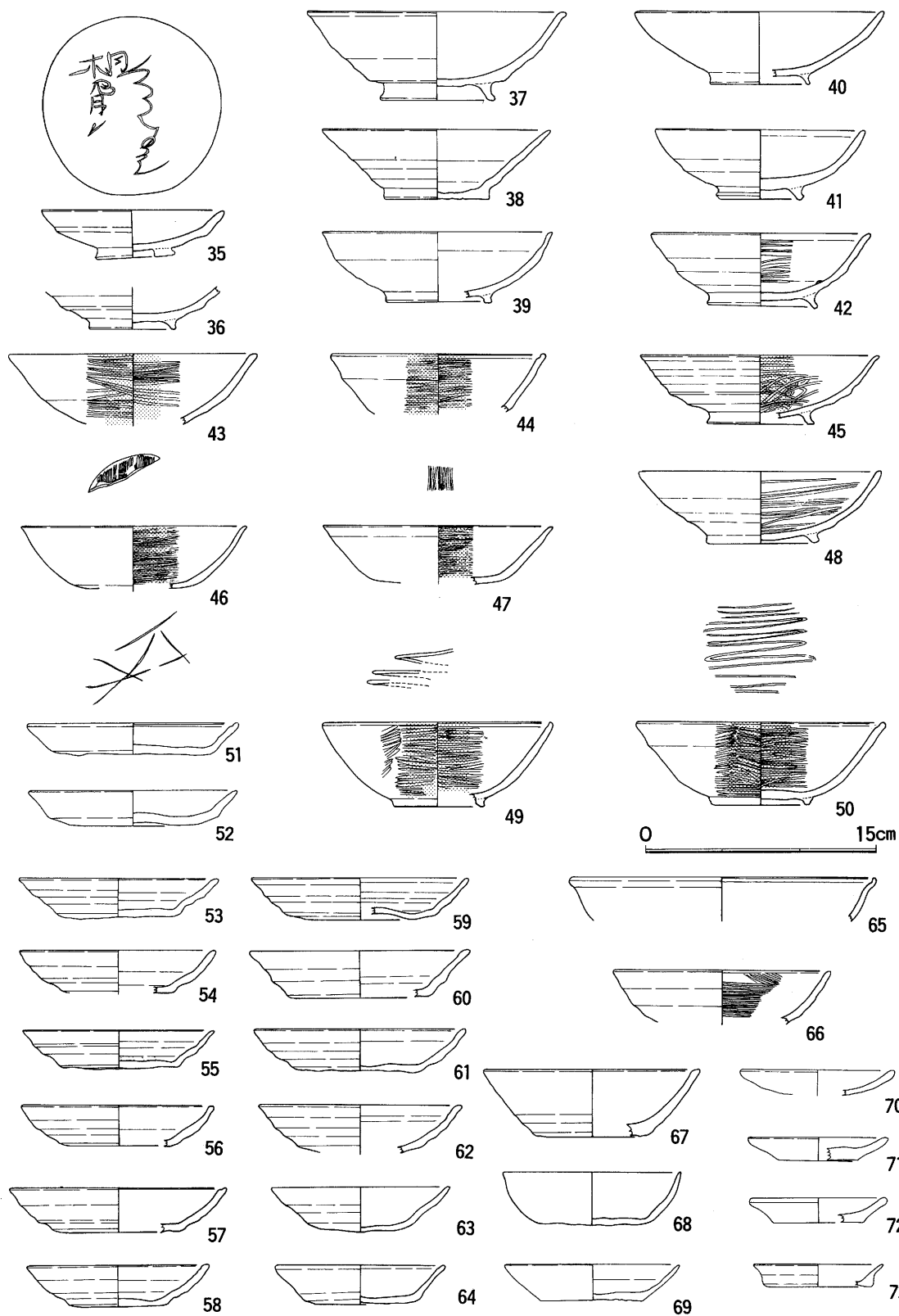
木器・鉄器・石器

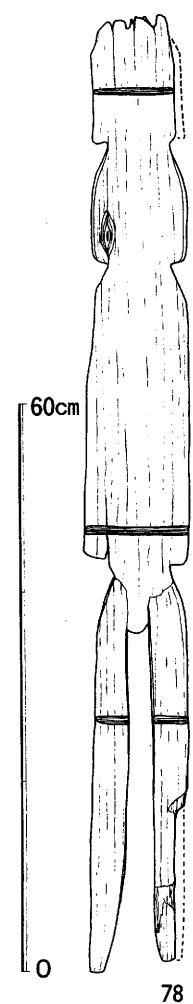
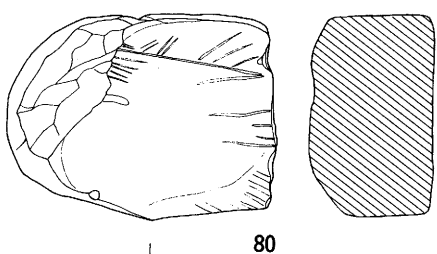
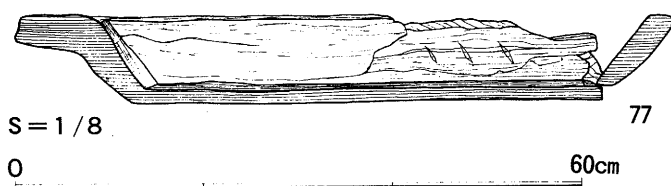
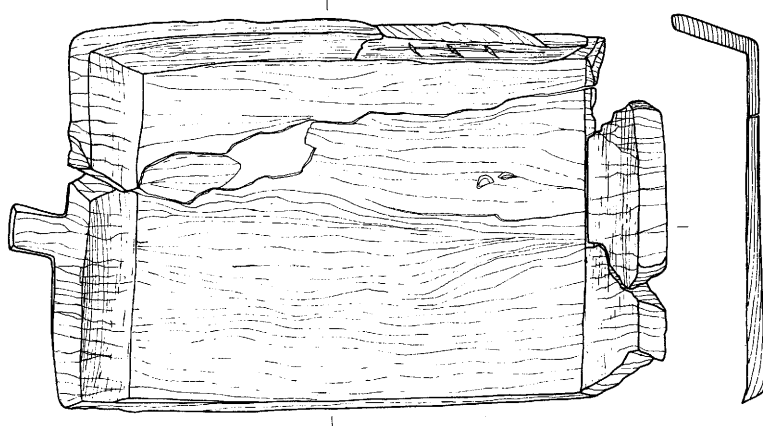
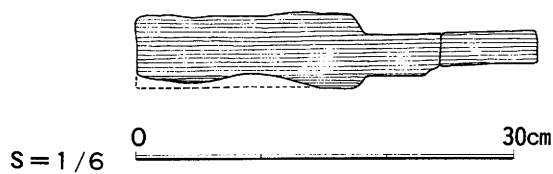
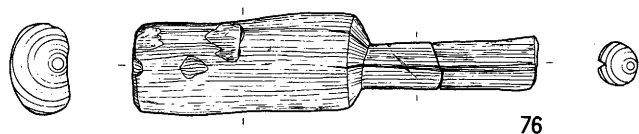
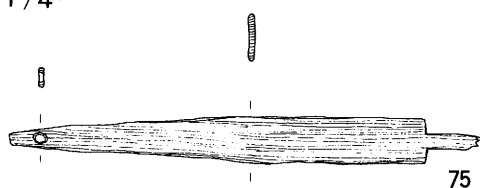
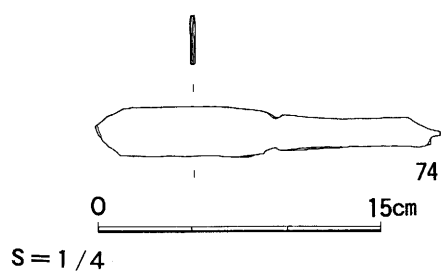
74は斎串あるいは鏃形と考えられる木製品。75は先端に1ヶ所穴を穿孔し、根本に抉りをいれた木製品で一弦琴の可能性がある。76は横槌で片面に使用痕が認められる。77は木槽で短辺の片側に把手が1つある。樹種は断定できないがケヤキなどの広葉樹である。78は全長102cmを測る大型の人形である。なお、木製品の多数は調査区北端から10～20m南の中層砂礫土から出土した。79は鉄製の鎌で先端に反りがある。80は砂岩製の砥石である。

Ⅳ ま と め

今回の調査で確認したのは、平安時代に埋没したと推定される自然流路であった。SD1は現在の荒光川の旧流路とも考えられる規模で、当時の水田耕作においては重要な役割を果たしていたと思われる。出土遺物は弥生時代中期・古墳時代後期・平安時代中期の3時期に大別できる。このうち、古墳時代と平安時代の遺物は比較的磨滅度が低く、完形品に近いものも多いことから同時期に近辺で集落が営まれていた可能性がある。今後の調査の進展によって、荒光谷の歴史が解明されていくことに期待したい。









調査区全景（北から）



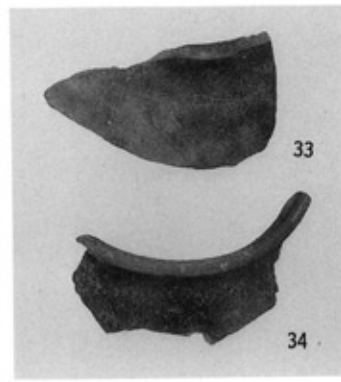
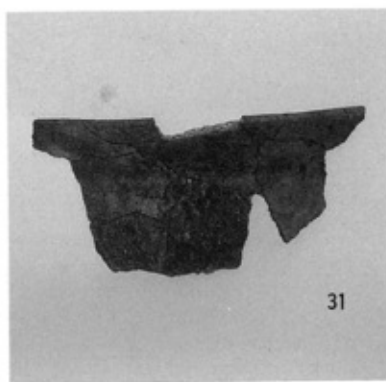
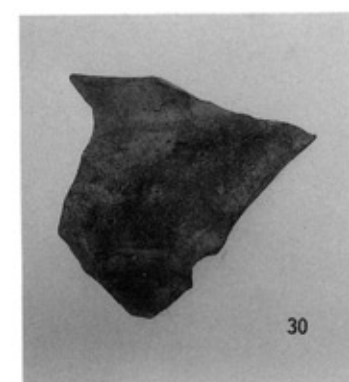
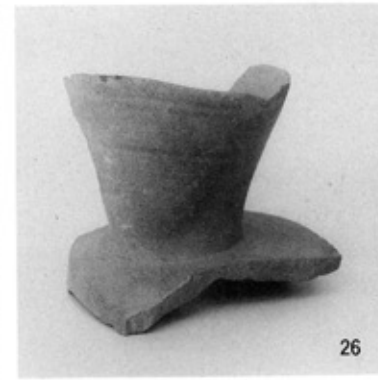
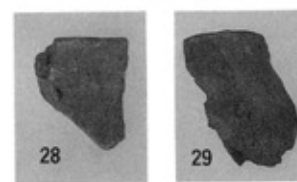
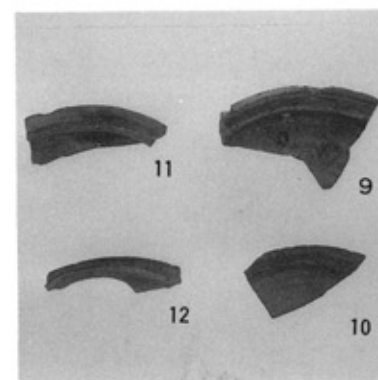
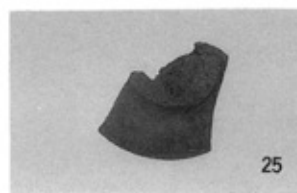
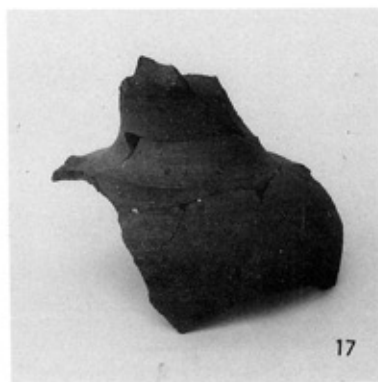
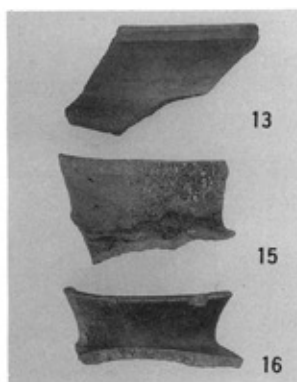
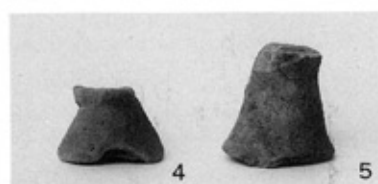
木製品出土状況（西から）

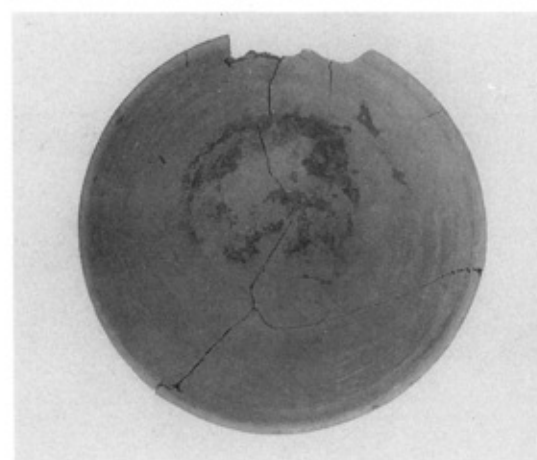
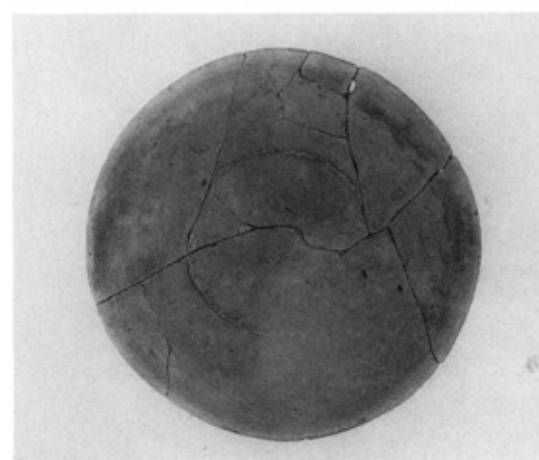
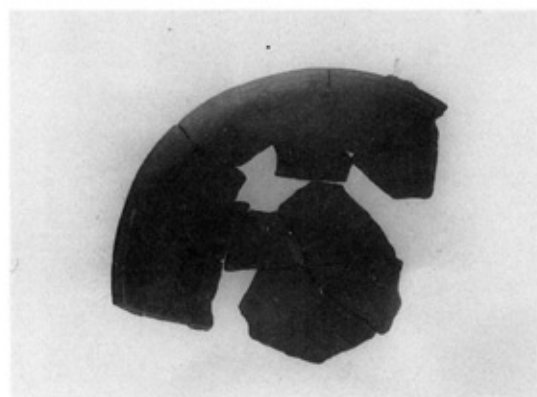
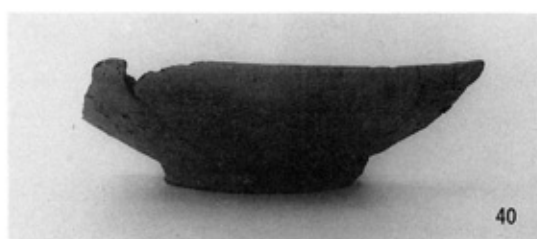


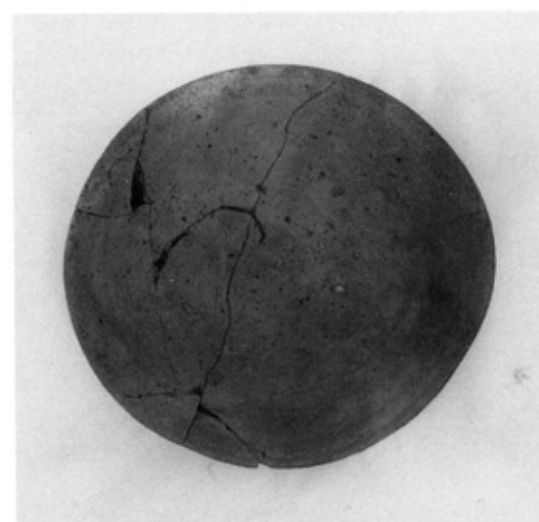
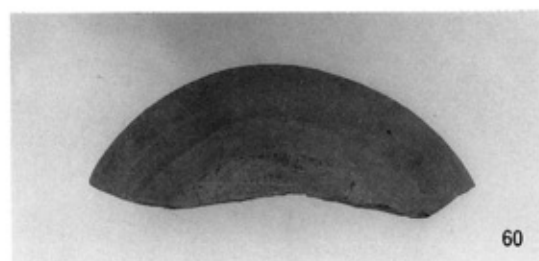
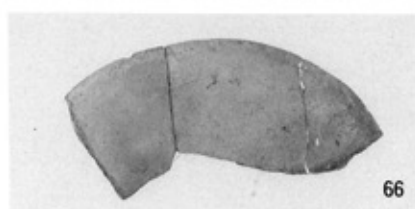
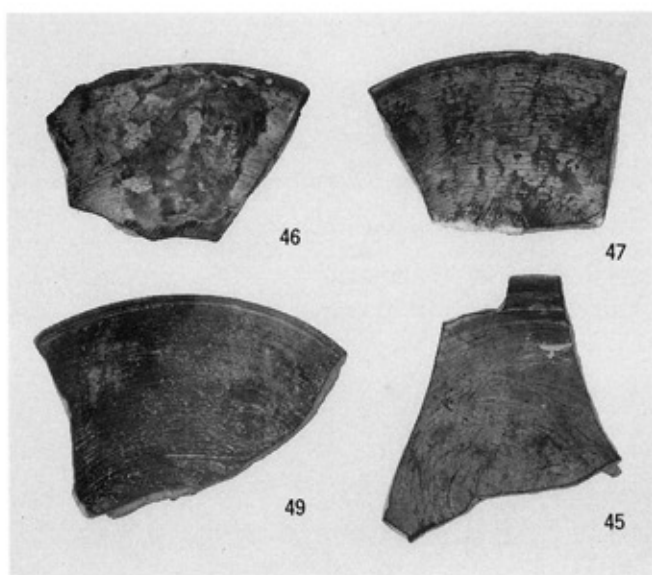
土器出土状況

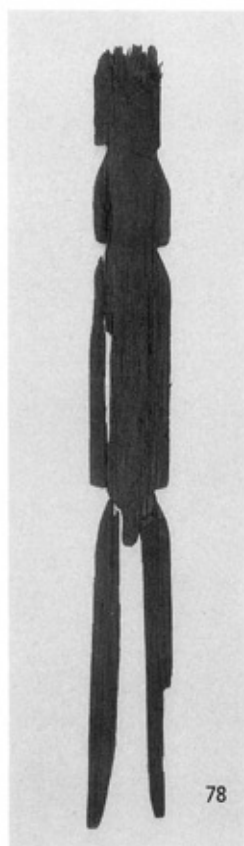
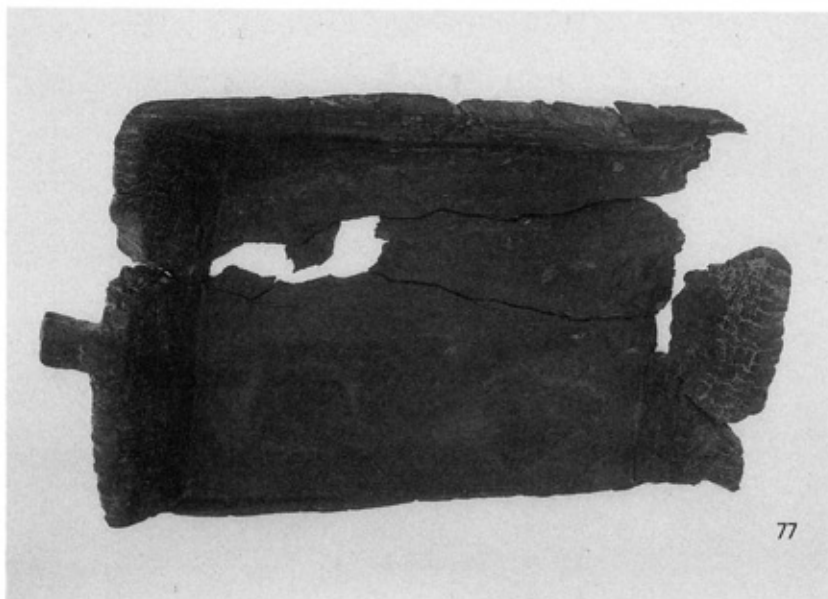
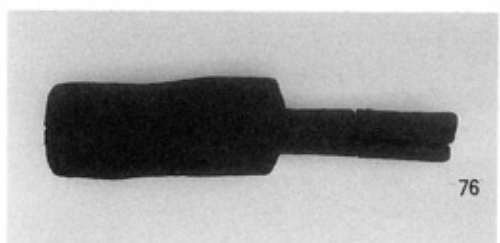
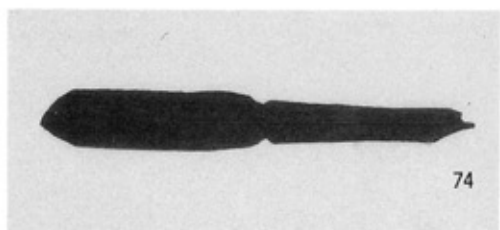


木槽出土状況









平成2年3月15日 発行

稲成遺跡発掘調査概報

編集 財団法人
発行 和歌山県文化財センター

印刷 邦 上 印 刷